

北軽井沢のカラマツ林で見つけたこのキノコは、担子菌門ハラタケ綱ベニタケ目に属するヤグラタケ（櫓茸、*Asterophora lycoperdoides*）です。写真では、黒く変色して崩れ始めたクロハツの子実体から、小さなヤグラタケがいくつも群生している様子が観察できます。ヤグラタケは「菌生菌」と呼ばれる、他のキノコに寄生して生活する極めて珍しい菌類で、宿主となるクロハツやベニタケ類が老成した頃を見計らって発生します。その姿が、土台となるキノコの上に小さな櫓が築かれたように見えることから、「櫓茸」という和名が付けられました。

この写真で特に目を引くのは、手前にある群生株の傘が淡褐色で粉をまとったように見える点です。これは成熟したヤグラタケに厚膜胞子が大量に形成されているためで、傘の表面は次第に粉状となり、やがて崩れるようになります。一般的なキノコが傘裏のヒダに担子胞子をつくるのに対し、ヤグラタケは厚い細胞壁をもつ厚膜胞子を主体として繁殖するという、非常に特徴的な生活史をもっています。写真の奥には、まだ白く若い子実体も見え、発生段階の違いが一枚の写真の中で比較できる点も興味深いところです。

北軽井沢では、クロハツ類が発生するカラマツ林やアカマツ林、広葉樹との混交林で夏から秋にかけて観察することができます。宿主となるクロハツが黒く崩れ始めているため、一見すると腐敗が進んでいるだけのようにも見えますが、その上では別種のキノコが新たな命を育んでいます。このような菌類同士の寄生関係は、森林生態系における物質循環や生物間相互作用を理解する上で重要な現象であり、目立たないながらも森の奥深い営みを静かに物語る、たいへん興味深い観察対象といえるでしょう。

（2026年7月中旬／北軽井沢）

